

桜花の候 宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員諸兄に於かれましては、益々ご清福の段 大慶至極に存じ上げます。

皆様には日頃より当支部運営に際して特段のご高配を賜り、深甚なる敬意を表すと共に、倍旧のご支援を伏してお願ひ申し上げる次第です。

二月二十八日は熊本健軍駐屯地にて番匠西部方面総監を表敬訪問し、翌三月一日は高等工科学校生徒同窓会「桜友会熊本大会」に参加させて頂きましたが、同日小野寺防衛大臣も佐世保西方連隊を視察に来られたとの事で、いま正に九州が国防の要石として注目されています。

そんな折、小川氏のメルマガよりタイムリーなQ&Aが届きましたから、お許しを得て皆様にも送付させて頂きますので、何卒ご一読下さい。

尚、同封のチラシと入場券は、来る五月三日の「憲法記念の日」に、ノンフィクション作家の「河添恵子氏」を講師にお招きして、「中国と日本で今起きていること」の演題でご講演を頂きますので、皆様お誘い合わせの上、ご来臨賜ればこれに選る幸せはありません。

◆◆「新兵器」から島嶼国家の防衛を考える

国際変動研究所理事長 軍事アナリスト 小川和久氏

Q：安倍晋三内閣は二〇一三年十二月十七日、「平成二十六年年度以降に係る防衛計画の大綱」と「中期防衛力整備計画」（平成二十六年年度〜平成三十年度）を閣議決定しました。防衛計画大綱は、おおむね十年間をメドに安全保障政策や防衛力の規模を定めた中長期的な基本計画の指針です。中期防衛力整備計画（中期防）のほうは、大綱に基づいて五年間の政策や装備調達量を定めた具体的な計画ですね。いずれも二〇一四年四月がスタートですが、今回は計画に登場した「新兵器」について解説してください。

小川：「二〇一四年度からの防衛計画大綱・中期防衛力整備計画で登場し、新しい防衛のあり方を象徴する『新兵器』は、水陸両用装甲車と機動戦闘車の二つです。日本の防衛力は、これら新兵器を導入することが決まって、ようやく島嶼国家の防衛力らしい方向に向かいはじめました。また、陸上自衛隊のあり方も『島嶼国家の陸軍』という方向がはっきり定まった、といえるでしょう」

「いうまでもなく日本は、国土のすべてが七千近い島からなる島国です。日本列島をつくる島嶼の数は、島の定義や数え方によっては約三七〇〇ともされます。いずれにせよ、とくに大きな島は本州、北海道、九州、四国の四つだけで、面積百平方キロ以上の比較的大きな島でも三十に満たない数です。日本は淡路島や小豆島など瀬戸内海の島々、そして弓型の『日本弧』に平行する佐渡島など近海の島々、伊豆七島―マリアナ弧に沿う伊豆諸島や小笠原諸島、琉球弧に沿う南西諸島など、海とともに生きる多くの小島が国土をつくっています」

「こうした島々を防衛するには、島に上陸した相手を、こちら腹背を衝く形で上陸して叩く必要があります。それには揚陸艦艇や水陸両用の能力をもつ部隊・装備が不可欠です。しかし、これまでの陸上自衛隊の師団編成は、ヨーロッパ大陸や中国東北部の大平原で機械化師団や戦車師団同士が戦うための組織をダウンサイジングしたようなものでした。日本は多数の島からなる島嶼国家で、しかも専守防衛を掲げているのですから、島国を守り切る編成・装備でなければならぬのに、一般論で軍事組織を編成し、日本の実情に合ったものにしてこなかったのです」

◆創設される日本版海兵隊・水陸機動団

Q：まず、新兵器を導入し運用する陸上自衛隊の編成は、どのように変わるのですか？

小川：「陸上自衛隊の編成定数は約十五万九千人（うち常備自衛官定員は約十五万一千人、即応予備自衛官員数は約八千人）で、この数は変わりますが、中身が変わります。これまでは北部・東北・東部・中部・西部という五つの方面隊があり、それぞれを方面総監が指揮していました。今後は、陸上総隊というものができ、陸上幕僚長の下にいる陸上総隊司令官がすべてを指揮するかたちになります。海上自衛隊の自衛艦隊（自衛艦隊司令官）、航空自衛隊の航空総隊（航空総隊司令官）に対応する編成です」

「また、これまでは有事の際に迅速に行動・対処する機動運用部隊として四千二百人規模の中央即応集団（CRF）をおき、ここに第一空挺団第一ヘリコプター団などを含めていました。CRFは二人の副司令官がそれぞれ国内・国外を担当し、ハイチ地震のような国際平和協力活動には、栃木県宇都宮市にいる中央即応連隊が派遣されています」

「今後は、この中央即応集団を廃止し、三個機動師団・四個機動旅団・

一個機甲師団・一個空挺団・一個水陸機動団・一個ヘリコプター団に再編します。このうち一個水陸機動団が新しくつくられる水陸両用の機動部隊で、これが新兵器の一つである**水陸両用装甲車**を装備します。中心になるのは長崎県相浦駐屯地の**西部方面普通科連隊**です」

●**陸上自衛隊・基幹部隊の編成**（「平成二十六年以降に係る防衛計画の大綱」別表より）

・**機動運用部隊**

【現状】中央即応集団・一個機甲師団

【将来】三個機動師団・四個機動旅団・一個機甲師団・一個空挺団・

一個水陸機動団・一個ヘリコプター団

・地域配備部隊

【現状】八個師団・六個旅団

【将来】五個師団・二個旅団

・地対艦誘導弾部隊

【現状】五個地対艦ミサイル連隊

【将来】五個地対艦ミサイル連隊（変更なし）

・地対空誘導弾部隊

【現状】八個高射特科群／連隊

【将来】七個高射特科群／連隊

※現状は平成二十五年末

小川：「平成二十六年以降に係る防衛計画の大綱の別表には注がついており、『戦車及び火砲の現状（平成二十五年末定数）の規模はそれぞれ約七百両、約六百両／門であるが、**将来**の規模はそれぞれ**約三百両、約三百両／門**とする』とあります。戦車三百両は、北海道と九州に配備する九〇《きゆうまる》式・一〇《ひとまる》式と古い七四式です。戦車は最盛期には一千百両ありましたが、四分の一近くまで減らします。これまでの**戦車に代わる**のが、もう一つの**新兵器・機動戦闘車**です」

◆**水陸両用装甲車と機動戦闘車**

Q：では、新兵器の水陸両用装甲車と機動戦闘車について解説してください。

小川：「水陸両用装甲車は、**アメリカ海兵隊**が使っている**AAV7**、通称『**アムトラック**』を二〇一四年度から**五十二両**配備する予定です。これは地上ではキャタピラ走行しますが、水に浮いて航行もできます。」

つまり、**上陸用舟艇の役割を果たし、そのまま地上を走る装甲車**となるわけです。地上では最高時速七十二キロで走り、水上ではウォータージェット推進で時速十三キロ（キャタピラ回転で時速七・二キロ）で航行します。乗員三人のほか兵員二十五人または貨物四・五トンを載せることができます」

「この水陸両用装甲車は、**沖縄のキャンプ・シュワブや韓国での上陸演習**によく登場するので、ニュース映像などで見かけた読者も少なくないでしょう。米海兵隊はこれを**イラクの沿岸から上陸**させてバクダッド進攻に使い、その後も長期間、一般的な装甲車として使っていましたし、アフガニスタンでも使っています」

小川：「**機動戦闘車は、別名『装輪戦車』**で、かたちは戦車に似ていますが、キャタピラでなく車輪で走行します。国産のものは**八輪で一〇五ミリの戦車砲**を搭載し乗員は四人です。開発が始まったのは二〇〇七年度で二〇一五年に開発完了し、二〇一六年度から**九十九両配備**する予定です」

「装輪戦車は、通常の戦車よりも**装甲が薄く、軽く造**られています。日本の**機動戦闘車は二十六トン。七四式戦車（三十八トン）、九〇式戦車（五〇・二トン）、一〇式戦車（四十四トン）**と比べても、いちばん重い**九〇式戦車の半分**近くまで軽量化されています。車輪はキャタピラほど踏ん張りがきかないので搭載する**火砲には制約**がありますが、**速度が速く（一〇式の七〇キロに対して機動戦闘車は百キロ以上）、しかも軽いので空輸が可能**です」

「機動戦闘車は、開発が進められている航空自衛隊の**次期輸送機C-2**に**一両ずつ積んで、たとえば宮古島や石垣島に持ち込む**ことができます。C-2の貨物搭載量は約三十トンですから、機動戦闘車ならギリギリ積めるのです。これまでの日本の輸送機の貨物搭載量はC-1が約八トン、C-130Hが約二十トンですから、戦車はおるか機動戦闘車も積むことはできません」

「**アメリカ空軍の大型長距離輸送機C5ギャラクシー**は、約百二十二トンの貨物を搭載でき、兵員七百五十人を運ぶことができます。それでも**大型戦車M1エイブラムス（M1A1が約五十七トン）**を**二両しか積みません**。戦車は、頑丈なパレットに載せ、床が抜けないように重量を分散させて搭載します」

◆ようやく理解された両用戦能力の必要性

Q：米海兵隊の使っている水陸両用装甲車をそのまま導入するのはおかしい、という批判をネットで読みました。これについては？

小川：「ジャーナリストの清谷信一氏による批判ですね。清谷氏は、初めからAAV7の採用が決定している『出来レース』あるいは『八百長』の可能性が高いといい、そもそもAAV7は日本の島嶼防衛作戦に向いておらず不要と主張しています。尖閣諸島を含む南西諸島のような珊瑚礁のリーフ海岸（リーフは礁《しょう》のこと。海面や海面近くに岩や砂が見え隠れする地形）では使えない、というのです。」

小川：「この批判に、防衛省は応えていません。AAV7が九十九里浜のような海岸のほうが使いやすいことは確かでしょうが、私は、南西諸島などでAAV7がまったく使えないということはあるまいと思いません。なにしろ日本は、水陸両用装甲車を導入したことが一度もないのですから、まず米海兵隊が使った実績のあるものをしばらく運用してみて、不都合があれば、そのとき調達を見直せばよい、と考えています」

Q：新兵器の水陸両用装甲車や機動戦闘車が必要だという声は、陸上自衛隊の現場には、昔からあったのですか？

小川：「本州の山中にある陸自駐屯地では、部隊の歴史を大切にし、どこで使うかはともかく、古い七四式を一生懸命整備・維持してきた戦車部隊もあるわけです。しかし、特に離島防衛に関わる自衛隊の現場では、水陸両用部隊や装備が必要だという話は、ずっと以前からありました」

「しかし、たとえば陸上自衛隊に米海兵隊と組織としてのつながりができたのは古い話ではなく、せいぜい四く五年前からです。昔から陸自は米陸軍とは家族のように仲良しでしたが、海兵隊とは付き合いがなく、彼らの装備や運用の仕方も、あまりよくわからなかったのです。沖縄の海兵隊については、連絡幹部しか置いていないので、陸自より私のほうが情報をもっていることがあったくらいです」

「幕僚レベルの交流から始めて、陸自と海兵隊の関係を深めていったのは、番匠幸一郎さん（現・西部方面総監）が陸上幕僚監部防衛部長だったときです。東北方面総監として東日本大震災対処の統合任務部隊を指揮し、その後陸上幕僚長に就任した君塚栄治さんも海兵隊が必要という考えでした」

「水陸両用の能力のある部隊が必要だ」という声は、昔からあったが、なかなか上のほうの理解が進まなかった。それが、ようやく理解され、実際に部隊編成と装備の導入が決まったわけです。実は、特殊部隊（特殊作戦群）の創設時にも同じような問題がありました。特殊部隊も、古い陸軍の考え方からすれば正統からはほど遠い異端の部隊で、陸上幕僚監部のトップエリートでも必要性を理解しているのは十%くらいとされていたのです。水陸両用部隊の創設は、陸上自衛隊の思考様式が大きく転換したことを象徴する出来事でもあるのです」

（聞き手と構成・坂本 衛）

以上のように君塚前陸幕長と番匠西方総監は共に海兵隊必要論者で、昨年六月十九日、私が防衛省へ表敬訪問した際は現役の陸幕長及び陸幕副長と云う陸自のNo.1とNo.2の大変な要職に就いておられました。

そのお二人が是非に必要と考えておられる「海兵隊」ですから、この部隊編成が不可能なはずがありません。

ましてや西方重視の防衛体制の中、その中心人物が「番匠西方総監」ですから、防衛省の期待の大きさが窺えようかというものです。

我々も九州に居を構える者の一人として、更には防衛協会青年部会の一員として、相浦に駐屯する「西方連隊」の今後には、大いなる興味と関心を持って頂きたいと存じます。

夜花に酔う咲く良き季節、存分に花見酒でもお楽しみ下さい。（笑）

重ねて五月三日の宮崎市民ホール「憲法を考える集い」にご参集賜りますよう、伏してお願い申し上げます。

平成二十六年四月一日

宮崎県防衛協会青年部会 宮崎支部 支部長 小倉 和彦